

# 臨床心理士養成課程におけるコラージュ療法体験授業の展開

— 施行法・技法の選択・検討法などの工夫を中心に —

今 田 雄 三

(キーワード: コラージュ療法, マガジン・フォト・コラージュ, イメージ, 臨床心理士養成, 体験的理解)

## 1. はじめに

森谷が1987年に、コラージュと箱庭療法との関連を再発見したことに端を発し(森谷, 1988, 2008), 我が国のコラージュ療法はその適応範囲を広げ, さまざまな技法上の工夫を受けながら発展し, 2009年には日本コラージュ療法学会が発足した。一方, 臨床心理士の養成において, 自己研鑽を目的としたコラージュ制作の体験は今日まで広く行われている。しかしながらコラージュ療法が技法として簡便で明快であるが故に, しばしば深い思慮なしに実施され, 表面的な理解で終わってしまう弊害も指摘されている。殊に臨床心理士を目指す修士課程大学院生にとっては, 授業や研修会などでコラージュ制作を初めて体験することが多いと思われる。その場合恐らく集団法での施行を体験し, 他の参加者とのシェアリングや教員・講師などからの技法の理論上の解説などを一通り受けることは出来るものの, それはあくまで初歩段階の研修であり, 「コラージュ療法とはどういう技法かを表面的になぞる」という域を出ないものであろう。こうした現状を鑑みるに, 「将来自分が担当するケースでコラージュ療法をどのように導入・活用するか」といった真に実践面へと連結された, いわば中・上級編の研修プログラムを開発, 実践する意義は非常に大きいと思われる。本論文では, 過去に試みられた自己啓発的なコラージュ療法に関する文献を概括・検討する作業を経て, 臨床心理士の実践に資するためのコラージュ療法を活用したプログラムの試案を提示し, 併せて現在までの筆者の実践を紹介し若干の考察を行うこととする。

## 2. 自己啓発を目的としたコラージュ療法に関する実践研究の概括

### (1) 非臨床群へのコラージュ体験としての実践研究

コラージュ療法が発展していくごく初期の段階で, すでに自己啓発を目的とした実践に関しての言及は行われており(森谷・杉浦, 1993), コラージュ療法の施行の容易さ, 明確な表現力は自己啓発的な体験として使い勝手がよく, 重宝されていったのはいわば自然な流れであったように思われる。いわゆる非臨床群を対象とした, 自己啓発としてのコラージュの利用に関してはこれまでに多くの実践・研究報告がなされている。こうしたコラージュ体験の目的は, 自己啓発的意義(杉浦, 1996ほか), 自己理解(青木, 2001/白石・則包, 2001/佐藤, 2003/烏丸, 2006ほか), 他者理解(青木, 2001/白石・則包, 2001/烏丸, 2006ほか), コミュニケーションの活性化(烏丸, 2007), ストレスの解消(寺田, 2005)などとされている。その対象は臨床心理士, 医療従事者, 介護士などの対人援助職(杉浦, 1996/上別府・海老沢, 1996/川又・金丸, 2006/豊嶋・菊池, 2007ほか), 教育関係者(川又・金丸, 2006/和田, 2008ほか), 企業の研修(緒方, 1999/青木, 2003ほか), あるいは一般人(和田, 2008ほか)などさまざまに渡っている。また特定の発達段階を対象とした実践研究としては, 幼児(高橋, 2008ほか), 小学生(芝, 1999/徳田, 1999/寺田, 2005ほか), 中学生(山根, 2002ほか), 高校生(中村・山下, 1996/荻野, 1999ほか), 大学生(青木, 2001/豊嶋・菊池, 2007/串崎, 2009ほか), 心理学を専攻する大学院生(串崎, 2009ほか), 看護学生(白石・則包, 2001/佐藤, 2003ほか), 専門職の成人(杉浦, 1996/上別府・海老沢, 1996/川又・金丸, 2006ほか), 高齢者(井上, 2007ほか)まで網羅されるに至っている。

### (2) 現在行われているコラージュ体験の典型例の想定と吟味

ここで, 現在大学院の授業や研修会などで広く行われているコラージュ体験プログラムの典型例を想定してみると, およそ以下のような手順で進められることが多いものと思われる(表1)。

表1 現在行われているコラージュ体験の典型例

- ①参加者を少人数のグループに分ける。
- ②教員・講師が教示を行い、各自がコラージュを制作する。
- ③作品が完成後、各自の作品を紹介し合い、お互いに印象や感想などをシェアリングする。
- ④教員・講師がまとめ・コラージュに関する講義・質疑応答などを行う

### ①参加者のグループ分け

参加者を少人数のグループに分ける理由は、制作後のシェアリングに備えて集団の凝集性を高めるためと、更には参加者が多数であった場合でもグループごとにはさみ・のりなどの用具を用意すれば、必ずしも人数分揃っていないなくてもやりくりが可能だという至って現実的な要請によるところもあるだろう。小グループの人数は4、5名が適当であろうが、場合によっては8～10名で行うことも可能ではあろう。なお1対1での制作を行う試みも報告されている（申崎，2009）。

### ②教示とコラージュ制作

上記の典型例では集団個人法により各自がコラージュを制作することを前提にしているが（青木，2001／佐藤，2003／川又・金丸，2005ほか多数），グループ全員で一つの台紙にコラージュを制作する集団集団法による展開も可能である（杉浦，1996，1997／佐藤，2004／石井，2008ほか）。またマガジン・ピクチャー・コラージュ法で制作されることが多いと思われるが（たとえば杉浦・鈴木・金丸，1996，1997／青木，2001／白石・則包，2001／佐藤，2003／川又・金丸，2005ほか多数），これはコラージュ・ボックス法で行うためには人数分の切り抜きをあらかじめ準備するには手間がかかりすぎるとい事情によるものであろう。なお筆者の場合、吟味したコラージュ用の切り抜きを予め大量にストックしてあるので、数十名の受講者に対してもコラージュ・ボックス法で制作してもらうことが可能である。

またこの段階で体験を深めるための技法上の工夫もいくつか行われている。たとえば佐藤(2004)はグループ・コラージュに連句を組み合わせる試みを行っている。また寺田(2005)は小学生の学級活動に子どもたちが自由に撮影した写真をコラージュの素材として用いる写真コラージュを考案し実践している。さらに申崎(2009)は、新たに相互コラージュ・ウォッチワード・テクニク（mutual collage watchword technique: MCWT）の開発を試みている。なお、適切な課題を設定した上でコラージュ制作に当たる課題法を用いた実践もいくつか発表されている（杉浦・鈴木・金丸，1996，1997／佐藤，2003／青地・金丸，2005／川又・金丸，2005ほか）。

### ③シェアリング

シェアリングの段階では、自分の作品について他の参加者から印象・感想をもらうとともに、複数の他の参加者の作品をみることで自己理解・他者理解・コラージュの多様な表現の可能性について知る機会を得ることにつながるとされる。集団力動的な作用により焦点化した試みとして徳永(1999)の連想コラージュ法、佐藤(2004)の円形台紙を用いた方法、久米川(2008)の輪番制コラージュ、石井(2008)のグループ共同コラージュ・アクティビティなどの試みが行われている。

### ④まとめ・コラージュに関する講義・質疑応答

この典型例のように、実体験のまとめを経てからコラージュに関する知識を整理して提示することは理にかなっていると思われる。なおこの際にコラージュ体験と何らかの心理的指標を組み合わせてコラージュの自己啓発的な効果を確認しようとする試みもいくつか行われている。具体的にはPOMS（杉浦・鈴木・金丸，1996，1997／青木，2001／近喰・若葉・吾郷，2003ほか），バウムテスト（杉浦・鈴木・金丸，1996，1997），多元的自我同一性尺度（青地・金丸，2005）などが利用されている。

以上、自己啓発的なコラージュ体験に関してはこれまでの実践の積み上げがあり、独自の工夫も行われていることが確認されたが、それらの実践はあくまでコラージュ体験と、それに伴う自己理解や他者理解、およびグループ力動を活用した参加者の心理的活性化の体験にあり、本論文の目的である、臨床心理士の養成課程において将来自らがコラージュ療法をケースに導入するためのトレーニングとしての体験を意識した研究は、残念ながら申崎(2009)の試みなど一部を除いてほとんど見つけることが出来なかった。

### (3) より実践的なコラージュ療法体験プログラムの考案に向けて

ここでは臨床心理士の養成課程において、将来自らがセラピストとしてコラージュ療法を面接に導入するためのトレーニングとして、どのような要素を取り入れたプログラムを構成するべきかについて、いくつか重要なポ

イントとなる提案を行うとともに出来るだけ具体的に検討していきたい。

### ①ロールプレイに準じた一対一の模擬面接場面での施行

臨床心理士養成のカリキュラムにおいて、面接場面の実際を意識して行われる演習として必須であろうと思われるのが、まずはロールプレイであろう。ロールプレイの参加者は二人一組となってカウンセラー役とクライアント役を演じ、一種の模擬面接を一定時間にわたって行う。ロールプレイの様子は逐語録及び音声・画像などのメディアに記録され、教員によって指導を受けることになる。ロールプレイを通して、臨床心理士を目指す大学院生は、現実の相談事例を担当する前にその難しさを身をもって体験し、臨床心理面接とは相手の話を「聴く」という専門技術に基づく実践行為であることを知るようになる。

さらに描画療法や箱庭療法、コラージュ療法においては、非言語的な表現が媒介になっているために「聴く」技術のみならず、相手の表現するイメージを「受け取る」技術を体得することが必要とされる。ところで、しばしば初学者から「クライアントに作品を作ってもらっている間、セラピスト側はどうしてればいいのかわからず戸惑う」との声が耳にすることがある。もちろんセラピストは化学実験の実験者のごとくにクライアント（およびその作品）を対象化して、一方的に観察に徹してればいいという訳では全くない。セラピストはクライアントに自由にして保護された空間（Kalff, 1966）を提供し、その枠の中でクライアントの自発的なイメージが作品となって表現し、展開されていくのを見守らなくてはならない。また作品に表現されたクライアントのイメージをセラピストが一方的に恣意的に解釈するのではなく、二人の共同作業としてイメージを共有し、展開・深化してゆくのを大切に育まなければならない。こうした面接場面におけるセラピストの姿勢を体験的に身に付けるためには、コラージュ療法の演習においても、ロールプレイに準じてセラピスト役とクライアント役を立て、一対一の模擬的な面接場面を設定してコラージュ制作を行う必要があると思われる。

なお串崎（2009）が開発した相互コラージュ・ウォッチワード・テクニック（mutual collage watchword technique : MCWT）の試みでは、大学学部生および大学院生を対象に、演習クラスの受講生が任意の組み合わせでペアをつくり、模擬的にセラピスト役とクライアント役となってMCWTを実施している。串崎（2009）によればMCWTの制作過程には(1)イメージの産出、(2)相手のイメージの取り入れ、(3)イメージの吟味（取捨選択）、(4)方向づけ（配置）といった、いわばセラピーのエッセンスが含まれており、MCWTと臨床場面とは近似しており、心理学を専攻する学生が、間主観的な臨床感覚を訓練するためのツールとなるものと思われると指摘している。筆者も同感であり、こうした取り組みが今後広範に行われることを是非とも期待したい。

### ②作品群への縦断的な見立ての訓練

次に、これも一般的によく言われていることではあるが、イメージを表現する技法である描画療法や箱庭療法と同じくコラージュ療法においても、一度の施行でクライアントへの見立てが完結するものではなく、複数のセッションでの継続した作品作りを行い、時系列に沿って作品を眺め、作品群を縦断的に見立てることでより理解を深め、セラピーの展開・深化を図るといった系列的理解が重視されており（杉浦, 1990, 1993）、こうした点についても十分に演習を体験しておく必要があると思われる。一般的にはまずコラージュ療法を用いたケースに関する事例報告を聞く機会を得たり、コラージュ療法に関する事例論文を読むことが第一歩になるだろう。次の段階としては、上記(1)で述べた通り一対一の模擬面接を経験してもらい、セラピスト役がクライアント役のコラージュ作品を自分なりに見立ててみる、という練習を踏んでおくことが想定される。

ここで問題となるのは、大学院生のコラージュ作品はあくまで非臨床例における作品であり、症状や顕在化した心理的問題を持ってセラピーを受けているクライアントの作品と比べると、表出されるイメージの深さ・凝集性は自ずと異なったものとなるということである。また時系列に沿って作品を制作したとしても、それが制作者自身の病理性や心理的問題とどのように関係しているか、セラピストとの関係性においてどのように変化しつつ展開していったのかをコラージュの表現から読み取ることはかなり難しい作業になってしまうだろう。要するに健康度の高い制作者の作品はそれなりに安定しているため、複数回のコラージュ制作を行ったとしてもその時系列に沿ったイメージの変化は微妙なものに留まり、セラピーにおける（時にセラピストにとって恐ろしいとすら感じられる迫力を伴った）場合と同質のイメージの変化は生じにくいと想定される。よって院生同士でコラージュを施行する場合には、適度にイメージの展開を賦活させるために何らかの工夫を行う必要があるだろう。具体的には制作者に対し適度な心理的負荷を掛けるような技法の導入を選択するべきである。そうした工夫により、制作者のところが負荷に対してバランスを取ろうとする動きを引き出すことが可能となり、非臨床事例においても作品群を通しての縦断的な流れや展開といった現象が生じてくることが期待される。こうした工夫により、非臨床例による模擬面接でのコラージュへの見立てをより臨床事例における見立てに近いものとして演習すること

が可能になるだろう。

なお、この点に配慮した具体的な工夫としては、コラージュ制作において適切な内容の課題にもとづいて作ってもらう課題法の導入が考えられる。課題法を適切に用いることにより、制作者に適度な心理的負荷を掛けることが可能になると思われる。先に述べた通り、課題を課してコラージュ制作を行って自己理解を促す試みは既にいくつか実践されている。その中でも藤掛（1999）は非行臨床の領域でコラージュを導入した際に、幻想的な願望ばかりがコラージュに表現された事例に対し、課題を指定することにより現実と幻想の折り合える点を模索していくことを目指したと述べており、課題法の持つ利点をよく示しているように思われる。

ただし、セラピスト役の院生がクライアント役の院生に対し、その都度個別に適切な課題を考えて提示することはかなり難しいことであると考えられるため、今回は一連の手続きに従って4つの課題に関するコラージュを制作していく Landgarten, H. B. (1993) のマガジン・フォト・コラージュ (Magazine Photo Collage: MPC) を用いることを提唱したい。この技法は未だ我が国の心理臨床では本格的に導入・実践された報告がみられないものの、明確な枠組みと手順に沿って制作することで多角的な見立てが可能であり、課題の設定やその提示の順序もよく考えられているため、第一段階から第四段階までの作品制作を通したイメージの展開を把握しやすい技法であり、むしろこうした初学者の研修において有効に活用出来る特質を備えているように思われるからである。

### ③グループスーパービジョンや事例検討会に準じたグループでの検討

従来の自己啓発的なコラージュ体験では、その場で全員がコラージュ制作を体験し、その後で各自が制作体験について語り合い、シェアリングをしていくという形式が多く取られている。しかしこれはあくまでも「クライアントがコラージュ制作を通して何を感じるかを知る」ためのクライアント体験の域を出ないように思われる。よって自らがセラピストとしてクライアントにコラージュ療法を行うことを目指した演習であれば、こうした枠組みとは別の形によるグループでの検討を取り入れる必要があると思われる。具体的には、上記(1)、(2)で述べたように、一対一の模擬面接場面で制作された複数の作品群について、セラピスト役が自分なりの見立てを行った資料を準備し、それを元に受講者全員で検討するという形式の導入が考えられる。いわば擬似的なグループスーパービジョンないしは事例検討会を行い、それを通してセラピスト役のクライアント役に対する関係の取り方、作品に対するコミットメントの姿勢、および見立ての妥当性などを検討することで、各自の力量の向上とセラピストとしての姿勢を体験的に学び、身に付けることが可能になると思われる。

## 3. コラージュ療法の実践を目指した演習（中・上級編）プログラムの試案

以上の検討を踏まえて、コラージュ療法の実践を目指した演習（中・上級編）プログラムの試案を以下に示す。なお大学院における半期授業（15コマ）で、受講者は10名を想定している。

表2 コラージュ療法の実践を目指した演習（中・上級編）プログラムの試案

|      |                        |
|------|------------------------|
| 第1回  | オリエンテーション・道具類の貸出       |
| 第2回  | 教員による模擬事例の発表           |
| 第3回  | さまざまな技法によるコラージュ制作体験（1） |
| 第4回  | さまざまな技法によるコラージュ制作体験（2） |
| 第5回  | グループによる検討（発表者A）        |
| 第6回  | グループによる検討（発表者B）        |
| 第7回  | グループによる検討（発表者C）        |
| 第8回  | グループによる検討（発表者D）        |
| 第9回  | グループによる検討（発表者E）        |
| 第10回 | グループによる検討（発表者F）        |
| 第11回 | グループによる検討（発表者G）        |
| 第12回 | グループによる検討（発表者H）        |
| 第13回 | グループによる検討（発表者I）        |
| 第14回 | グループによる検討（発表者J）        |
| 第15回 | 本授業のまとめ                |

第1回では、授業の大筋の枠組みを示し、今後の授業計画を発表する。二人一組で模擬面接場面を設定してコラージュ制作を行うための振り分けを行い、コラージュ制作に必要な用具の貸出も行う。なお、実際のコラージュ

制作はプライバシーの保たれる場所（面接室など）を用い、放課後などの空き時間に行うこととする。

第2回では、非臨床事例（協力者）に対して行ったマガジン・フォト・コラージュについてまとめた資料にもとづき教員が事例発表を行う。その際に配布された資料のフォーマットやプレゼンテーションの方法は、受講生自身が発表する際に参考に出来るように工夫されていることが必要である。

第3回と第4回では、さまざまな技法によるコラージュ制作体験を行う。その理由は、マガジン・フォト・コラージュだけでは網羅されないコラージュという技法の持つ特性を体験的に知ることと、模擬面接場面でのコラージュ制作と資料のまとめにはかなりの日数を要するため、発表までに十分な期間を取りたいという現実的な要請による。

このコラージュ制作体験で取り上げる技法としては、たとえば山中（1993）のコラージュを加味した相互ぐるぐる描き物語統合法（mutual Scribble story making with collage : MSSM+C）や串崎（2009）のMCWTなどの交互法を加味した、クライアント役とセラピスト役の波長合わせが体験出来る技法、または集団集団法によるグループでのコラージュ制作、あるいは美意識の満足（杉浦，1991）という面では少々弱い面を持つマガジン・フォト・コラージュでは網羅されにくい、技法として苦手な部分を補完するために、色彩コラージュ法（山根，2003／矢野・小坂，2008）などを行うといった授業展開が考えられる。

第5回から第14回までは、受講者各自が交代で発表者となり、セラピスト役としてクライアント役に制作してもらった一連のコラージュについての見立てを発表し、受講者全員で検討し、教員が助言を行う。複数の目で検討することで発表者が気づいていなかった点についても視野が広がり、またセラピストとしての姿勢を学び合うことにもつながる。

第15回では、受講者全体で本授業についての感想・意見を述べ合う。この際「自分が今後セラピストとしてクライアントに向かう姿勢」や「面接の中でコラージュを作ってもらうことの意味や難しさ」などについて話し合ってもらって展開も可能である。

#### 4. 筆者の大学院授業における実践から

筆者は過去3年間にわたって大学院授業「臨床心理学演習」の分担として、8～12名の受講者を対象に、ほぼ上記の内容でコラージュ療法の演習を実践してきた。個々の事例において表現されたコラージュ作品の紹介は別の機会に譲るが、今回は受講者の感想、印象を中心に簡単に紹介しておく。

##### (1) 対象・方法の概略

修士課程1年次の後期にほぼ上記の授業案に沿う形で演習授業を行った。各年度の受講者数は年度より異なるが10名前後であり、その中には学校現場から派遣された現職教員も含まれていた。コラージュ療法については他の研究会などで制作した経験がある者が多かったが、中には全く経験のない者もいた。なお各種の技法によるコラージュ体験としては、4～6名の2グループに分かれての集団個人法と集団集団法でのコラージュ制作とシェアリングの体験や、佐藤（2004）の実践を参考にした大型の円形台紙での集団集団法によるコラージュ制作とシェアリングなどを行った。

##### (2) マガジン・フォト・コラージュを用いた授業実践の留意点

なお、マガジン・フォト・コラージュは従来我が国で広く行われてきたコラージュ療法の技法と若干趣を異とする点があるため、実践に当たっての留意点を以下にまとめておく。

###### ①切り抜きの準備・整理

事前に十分な数の切り抜きを用意しておく必要がある。しかも「人物」と「それ以外の物（さまざまな物）」を別々の箱に分けておく必要があり、さらにそれぞれカラーと白黒の写真が含まれるようにしたり、人物にしてもさまざまな年代、職業、属性、一人だけ、ペア、集団の写真や、表情や動作が明確でイメージが鮮明な写真を用意する必要があり、十分な準備期間を持って切り抜きを収集・整理しておくことが必要である。

###### ②技法に合った制作態度を教示

美的満足を求め、凝った作り込みを追求するのではない。台紙上での切り抜きの配置や構成にこだわるというより、感じたままにざっと貼り付けていく要領で作っていくのがこの技法には合っているようである。「あまり考えすぎず、なるべく感じたままに、さっと選んで貼っていくようにしてみてください」と教示するのがよい。

### ③技法の特質の理解とクライアント役への配慮

また、課題に基づいてコラージュを作ってもらふ技法であり、その課題が対人関係や善悪の価値判断、将来への展望に関するものとなっている関係上、技法の持つ性質としては願望充足的というより現実志向的である。それなりに侵襲度の伴う、心理的な負荷のかかる課題であることを十分に自覚することが不可欠となる。またコラージュ作りにおいて作り手がファンタジーの自由な展開を指向する場合、この技法では満たされず、不全感を生じさせることに対しても配慮が必要である。

### ④言語化の重視

マガジン・ピクチャー・コラージュは言語化を重視した技法である。貼り終わった後で、クライアント役の連想を聞くことを端緒とした活発な言語的交流が重要となってくる。そうしたやりとりを通して、セラピスト役が一方的・恣意的・独善的な解釈に陥ることを防ぐことになると思われる。

### ⑤クライアントの心理的課題に合致した新たなコラージュ制作課題の提示

マガジン・ピクチャー・コラージュは治療技法として用いる場合には、クライアントの心理的課題をよく考慮した上で新たに課題を考えて施行することとなっている。これに準じて、セラピスト役がクライアント役に対して「五つめの課題」として何が適切であるかを実地を考え、実際にクライアント役に提案・取捨選択してもらった後、実際に作ってもらふことでセラピストとしての見立ての力や、関係性について学ぶよい機会になると考えられる。

## (3) マガジン・フォト・コラージュの演習による効果

本授業のまとめとして「クライアント体験として印象的だったこと」「セラピスト体験として印象的だったこと」を自由記述で回答してもらった受講者からの感想を検討することで、マガジン・フォト・コラージュの体験がコラージュ療法を臨床実践で使いこなすための演習として効果が発揮されたと感じる点がいくつか浮かび上がってきた。それを三点に集約して、以下に具体的に紹介しておく（なお具体的な感想の内容については巻末資料1・2を参照されたい）。

### ①関係性の中での「表現」であることを実感する

受講者の多くが感想として挙げていたのが、たとえば「セラピスト役に見守られている感じがして、とても安心して取り組むことが出来た」「受け止められている感じがして、あまり言わないでおこうかなと思っていたことを言ってしまった」「作品について話を聞いていくことで、クライアント役の思いがいろいろ伝わってきてよかった」「クライアント役にどこまで踏み込んでよいか難しい」「クライアントがコラージュを作るのを見て、質問をして、という作業を通じて、一緒に一つの作業をしている感じがして、ただ横にいるだけではないのだなと思った」といった、クライアント＝セラピスト関係に関する気づきであった。先に述べたように、コラージュ療法においてセラピストはクライアントの表現するイメージを「受け取る」技術を体得することが不可欠だと筆者は考えているが、一対一の模擬面接場面を設定し、しかもマガジン・ピクチャー・コラージュという一定の手続きに従って、クライアントとセラピストが作品の表現について言語化を行う技法は、その点において非常に有効であると感じられた。

### ②「見立て」の力をつける

他に受講者の感想で多かったものは、たとえば「解釈が難しいと感じた」「第五課題のテーマはこれでよかったのだろうかという不安がある」「見立てを行うのに自信がなく、当たり障りのない言葉を選んでいたところがあった」「発表でいろいろ意見をもらって多面的な見方があることがよくわかった」といった、作品の解釈やクライアントに対する見立てに関することであった。上記で見たように、多くの受講者がクライアント＝セラピスト関係に準じた関係性の中でコラージュが作られていく体験を実感しているのに対し、作品を解釈したり、作品を通してクライアント役の心理的課題を見立てたり、それに適したコラージュのテーマを与えたりすることは難しく感じられたようである。これは、クライアント役とセラピスト役との心理的距離が近く、親和的なものであるために生じた現象であるように思われる。

こうした現象は初心者のセラピストでは割と多いことであろう。それがよい方向に作用した場合、転移性治癒が生じることでセラピーが成功しやすくなるということもあるだろう。しかしそれは一種のビギナーズラックに過ぎず、逆に「クライアントに心理的に巻き込まれる」といった形で裏目に出る場合もよくあることである。よってセラピストはクライアントとの関係性・親和性に腐心するのみならず、一方ではクライアントとの間で適切な心理的距離を取りつつ、冷静かつ系統立った分析力・判断力をも働かせなくてはならない。こうした二律背反

に陥りかねない微妙なバランスの上に心理臨床の実践が成り立っていくということを意識するきっかけとして、この授業は十分に機能し得るものと思われる。

### ③セラピストとしての「表現力」を身につける

さらに印象的だった感想として、たとえば「自分が作品から受けた印象をうまく言葉で表現出来なかった。うまく言語化して返せるようになればと思った」「感じたこと、思ったことを言葉として表現して伝えるということは、コラージュ作品で表現する以上に自分にとっては難しかった」「間違ってもいいから、もっと自分の感性を言語化して発表すべきだったと反省。豊かに言語表現する力を養ってゆかねば」といったことが挙げられる。セラピストとしての「表現力」というのは少々耳に馴染まぬ言葉ではあるが、案外にセラピーを左右しかねない重要な要素なのではなかろうか。コラージュ療法はいわゆる非言語的なアプローチの一種であり、コラージュで示された非言語的な表現を安易に「言葉に置き換えて説明しようとする」ことはせつかくの作り手のイメージの多義性に対し一通りの意味で限定してしまい、表現の持つ生命力を殺してしまうことになりかねない。

そうではなくて、非言語的なイメージに対しては、まずもってセラピストがそれを受け止め、それに反応し・触発されて自分自身の中でイメージがわき上がってくるのを待ち、それを自分自身の言葉としてつかみ取り、そっと自他に投げかけてみるというスタンスが必要である。言い換えれば、セラピストは自分自身の中でクライアントの非言語的なイメージと言葉をつなげるように心理的作業を行う必要がある。この場合どのような性質の言葉が求められることになるかと言えば、非言語的なイメージを限定しその生命力を奪うような「閉じた」言葉ではなく、その言葉を添えることで一層イメージが豊かになり、連想が広がるような「開かれた」言葉であろう。こうした「開かれた」言葉を面接の中で使いこなすためには、セラピストはクライアントと関係性をもってつながり、イメージを共有しながらも、同時に自分独自の判断基準をしっかりと働かせていなければならない。言うなればセラピストは上述の(1)と(2)で求められる要素を止揚させた段階に達していることが前提であり、上級編としての到達目標だと考えるべきなのかもしれない。

#### (4) 今後の課題

今回は授業実践の枠組みの構築に当たっての工夫を述べた上で、その効果について総括的な考察を中心に論述したが、今後は本実践におけるコラージュ作品を提示し事例研究を中心とした検討を行う必要がある。また本実践に何らかの心理学的指標を用いた効果判定を採り入れることも検討してみる必要があるだろう。

## 5. おわりに

以上、臨床場面でのコラージュ療法導入を視野に入れた、コラージュを用いた中・上級の研修プログラムとして筆者の授業実践を紹介し、若干の考察を行った。さらなる実践と検討が必要であるが、今後とも臨床心理士を目指し学んでいる大学院生とこの試みを継続し、臨床的技能の研鑽に努めたい。

## 文献

- 青地邦宏, 金丸隆太 コラージュ技法における課題制作に関する一考察 茨城大学教育実践研究 24 2005 349-363
- 青木智子 コラージュ技法・療法の現状と課題 —— コラージュ技法・療法の解釈, 現状の成果と問題点 —— カウンセリング研究 33 (3) 2000 323-333
- 青木智子 社内研修におけるグループへのコラージュ療法導入の試み 産業カウンセリング研究 6 2003 11-16
- 青木智子 グループにおけるコラージュ技法導入の試み —— コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討 —— 日本芸術療法学会誌 32 (2) 2001 26-33
- 藤掛明 非行臨床におけるコラージュ療法 森谷寛之, 杉浦京子編集 コラージュ療法 現代のエスプリ 386 至文堂 1999 219-227
- 井上裕子 精神分析的コラージュ理解の試み —— デイサービス利用の高齢者を対象に —— 比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター年報 3 2007 15-22
- 石井雄吉 グループ共同コラージュ・アクティビティの勧め 多摩心理臨床学研究 4 2008 41-44

- 上別府圭子, 海老沢左知江 臨床場面におけるコラージュの使用上の留意点 —— 学会ワークショップおよび精神分裂病のコラージュの検討 —— 臨床描画研究 11 1996 60-82
- 烏丸佐知子 コミュニケーションワーク活性剤としてのコラージュの有効性について 京都文教短期大学研究紀要 46 2007 109-119
- Kalff, D. M Sandspiel Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche, Rascher Verlag, Zürich und Stuttgart, 1966 (河合隼雄監訳, 大原貢・山中康裕共訳 カルフ箱庭療法 誠信書房 1972)
- 川又真吾, 金丸隆太 父性の有り様についての一考察 —— 中学校教員の課題制作コラージュによるイメージからのアプローチ —— 茨城大学教育実践研究 25 2006 271-285
- 串崎真志 相互コラージュ・ウォッチワード・テクニクの試み 関西大学文学部心理学論集 3 2009 1-4
- 近喰ふじ子, 若葉陽子, 吾郷晋浩 コラージュ療法の「合同法」において展開された「裏コラージュ」制作行為の意味 日本芸術療法学会誌 34 (2) 2003 14-21
- 宮本邦夫, 中山幸子 本邦におけるコラージュ療法に関する文献目録(1988-2003) 東海女子大学紀要 23 2003 167-174
- Landgarten, H. B. Magazine Photo Collage: A Multicultural Assessment and Treatment Technique Brunner Routledge, Inc. part of the Taylor and Francis Group, and Paterson Marsh Ltd. 1993 (近喰ふじ子, 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 服部令子訳 マガジン・フォト・コラージュ —— 心理査定と治療技法 —— 誠信書房 2003)
- 森谷寛之 心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用 精神神経学雑誌 90 (5) 1988 450
- 森谷寛之, 杉浦京子 コラージュ技法の導入方法 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 山中康裕編 コラージュ療法入門 創元社 1993 5-14
- 森谷寛之, 杉浦京子編集 コラージュ療法 現代のエスプリ 386 至文堂 1999
- 森谷寛之 コラージュ療法の起源をめぐる諸問題 —— 基礎となる初期文献資料を中心に —— 臨床心理研究 10 2008 33-66
- 中村俊介, 山下一夫 自己啓発としての体験コラージュの試み —— 高等学校の授業実践を通して —— 鳴門生徒指導研究 5 1995 3-16
- 荻野政廣 自己啓発・自己理解としてのコラージュ体験授業 心の教育授業実践研究 1 1999 101-110
- 佐野友泰 コラージュ療法研究の展望と課題Ⅰ —— 事例研究の動向 —— 日本芸術療法学会誌 38 (2) 2007a 6-16
- 佐野友泰 コラージュ療法研究の展望と課題Ⅱ —— 基礎研究の動向 —— 日本芸術療法学会誌 38 (2) 2007b 17-29
- 佐藤仁美 看護教育におけるコラージュ活用の試み自己理解・他者理解・相互理解 心理臨床学研究 21 (2) 2003 167-178
- 佐藤仁美 教育場面における「グループ・コラージュと連句」導入の試み 日本芸術療法学会誌 35 (2) 2004 43-51
- 芝三知世 新入学児童の学校適応過程におけるコラージュ活動の試み 森谷寛之, 杉浦京子編集 コラージュ療法 現代のエスプリ 386 至文堂 1999 186-193
- 白石裕子, 則包和也 精神科看護演習におけるコラージュ療法の活用 —— 学生の自己理解・他者理解の促進をめざして —— 香川県立医療短期大学紀要 3 2001 141-147
- 杉浦京子 コラージュ療法の事例とその精神分析的解釈の試み 日本医科大学基礎科学紀要 11 1990 47-55
- 杉浦京子 コラージュ療法の治療的要因と特徴について 日本医科大学基礎科学紀要 12 1991 21-28
- 杉浦京子 コラージュ療法の基礎的研究Ⅱ —— 表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ —— 日本医科大学基礎科学紀要 14 199 11-34
- 杉浦京子, 鈴木康明, 金丸隆太 集団コラージュの自己開発的意義について —— 高齢者問題に関わる対人援助者の自己啓発に用いた集団コラージュ —— 安田生命研究助成論文集 32 1996 174-180
- 杉浦京子, 鈴木康明, 金丸隆太 集団コラージュ制作の効果 —— 社会心理学的, 臨床心理学的考察 —— 日本医科大学基礎科学紀要 23 1997 1-15

鈴木由美, 佐藤いづみ 大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究 聖徳大学研究紀要短期大学部 33 2000 57-62

高江洲義英, 入江茂編 芸術療法実践講座3 コラージュ療法・造形療法 岩崎学術出版社 2004

高橋沙織 コラージュをとおして幼児と関わることの意味 —— 幼児集団への心理的アプローチ —— 別府大学臨床心理家旧 4 2008 54-60

寺田政史 学級活動における「写真コラージュ」の試み —— 感情表出がストレス気分軽減に及ぼす影響 —— 日本特別活動学会紀要 13 2005 75-84

徳永桂子 連想コラージュ法 森谷寛之, 杉浦京子編集 コラージュ療法 現代のエスプリ 386 至文堂 1999 75-77

山中康裕 コラージュ療法の発展的利用 —— MSSM+C 療法の紹介 —— 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 山中康裕編 コラージュ療法入門 創元社 1993 123-135

山根和子 色彩コラージュの考案と中学校での実施 鳴門教育大学修士論文 2002 (未刊行)

矢野博幸, 小坂浩嗣 図画工作科の授業が児童に与える心理的効果 —— 色彩コラージュを用いて —— 鳴門生徒指導研究 18 2008 32-44

和田百合子 スクールカウンセリング業務におけるカウンセリング研修の考察 —— 10年の経過における考察とコラージュを用いた「癒し系研修」の提案 —— 美作大学・美作短期大学部紀要 53 2008 97-105

### 【巻末資料1：クライアント体験として印象的だったこと】

\*本授業を受講した者(3年間でのべ26名)を対象に「クライアント体験として印象的だったこと」を自由記述(複数回答可)で回答してもらった意見をまとめたものを下記に示した。なお( )内の数字は同じ内容の意見を記述した物が複数いた場合の回答者数を示す。

#### 自己への気づきについて

- ・思ったより作品に自分の無意識や内面が出ていた。(6)
- ・思っていたよりもエネルギーを使う・疲れるものだと感じた。(4)
- ・まず一番に楽しかった。(3)
- ・自分を表現出来たと思う。(3)
- ・表現したことで自分の中にあった思いが自覚出来た。(2)
- ・とても大切な体験だった。
- ・無条件の出会いを経験出来たと思う。
- ・自分の今まで気がつかなかった特徴がわかった。
- ・絵を描くことが苦手なので、コラージュはやりやすかった。
- ・自分を見つめることが出来た。
- ・作り終わって眺めるのも少し自分の手を離れた感じで興味深いと思った。
- ・後でもう少し自分をおさえて制作すればよかったかなと思った。
- ・自分の中でどこまで素直に表現しようかと迷うところがあった。
- ・作品作りには楽しさも感じられるが、心の中はさまざまに葛藤していて、楽しいだけではないもののように感じられた。
- ・自分が出てしまうのではないかという不安より、自分のことについてもっと知りたいという気持ちがあったので抵抗なく取り組めた。
- ・コラージュを行うこと自体が私にとって癒しの作業だった。
- ・積極的に取り組めた。
- ・第三課題で「悪いもの」も難なく選べたことがやり終わってみると意外だった。
- ・制限がある中で思ったより自分が出ていた。
- ・ここまで自分が表現されるとは思わず、侵襲度は予想していたよりもあり、怖くなった。
- ・無意識に制限枚数を超えて切り抜きを貼っていたり、シンメトリーに貼っていることが多かったり、自覚してなかったのが驚いた。

### セラピスト役との関係性について

- ・セラピストが受け止めてくれる感じがして、自分を出そうという意欲が増した。(2)
- ・全く防衛することなく自分をさらけ出したにもかかわらず、セラピスト役ががっちり受け止めてくれた。
- ・セラピスト役に見守られている感じがして、とても安心して取り組むことが出来た。
- ・コラージュは一人でやるのではなく、誰かに見守られながら作ることが大切だと感じた。
- ・セラピスト役が自分のことを考えてくれているのがわかりとてもよかった。
- ・切り抜きを選ぶのに時間がかかってしまった時、セラピスト役がどっしりと構えてくれていたので、安心して、自由に選べた。
- ・制作を行っている時は、セラピスト役の視線を意識した。発表の時セラピスト役が自分の作品や制作態度について考察してくれた内容がありがたく、今でも心に残っている。
- ・クライアント役に応じて、またセラピスト役の個性とあわせてフィードバックを行って感じがよかった。
- ・セラピスト役のことも気遣う自分もいて、葛藤があった(制作にかかる時間、貼る切り抜きの内容など)。
- ・自分は全くそうではなかったが、作品を作っているところを見られていると作りづらさを感じる場合もあるかもしれないと思った。
- ・作品があることで話しやすかった。
- ・セラピスト役がすごくいい雰囲気を出してきてくれて楽しむことが出来た。
- ・セラピスト役と話すことで心がなごんだ。
- ・自分のこと(自分像)がセラピスト役に伝わった感じがした。その中で自分が自分に求めているもの、目標が自分の中で見つかったことに驚いた。自分一人では出来なかったことが、セラピスト役に受け止められたからこそ出来たのだと思う。
- ・受け止められている感じがして、あまり言わないでおこうかなと思っていたことを言ってしまった。
- ・セラピストに見られていると少し照れが生じた。視線の置き場も考えないといけないと考えさせられた。
- ・セラピスト役があまり深い解釈をしなかったのが、自分が楽になれた感じがした。
- ・第五課題を選ぶ時、セラピスト役が意図した課題を選んでしまった。それまでの課題を通して良好な関係が築かれていたからか。
- ・時に頷をかしげるコメントもあったが、セラピスト役の解釈はだいたい自分も同意出来るものであった。
- ・クライアント役は、セラピスト役の一言一言や、非言語的な表現にも影響されやすい状態になると気づいた。
- ・セラピスト役とクライアント役は影響されやすいものだったと思った。作品まで似通るところがあった。
- ・セラピスト役に解釈してもらおうと、「自分らしさ」がしっかりと表れていて驚いた。
- ・最初はセラピスト役に観察されていることが気になっていたが、一つの課題が終わる度にセラピスト役と話すことで少しずつ緊張も取れていき、見られていることも気にならなくなった。
- ・思いついたまま気になった絵をコラージュしただけだったが、セラピスト役の解釈を聞いて「なるほど」と思うところが多かった。
- ・自分の内界で何が起きているのかを真剣に取り上げて貰えたことが最も心地よかった。普段は「粗末」に扱われている部分が丁寧に扱われるのは「快」であった。
- ・どの程度自分が表現されるのか、セラピスト役にどう受け止められるのか、疑問を感じながら体験していたが、セラピスト役の解釈を聞いて、自分では無意識にしていたことに様々なことが含まれていたのだと知った。

### 臨床実践への気づきについて

- ・あまり自分の興味をひく切り抜きがなかったもので、クライアントをよく観察しその人に合った写真を入れておくことが大切だと思った。(2)
- ・自分はコラージュをつくることに抵抗はなく、満足感が大きかったが、しかし人によって感じ方は違うのかもしれないと思った。
- ・第二課題は少し自分には抵抗があったので、侵襲度への配慮の大切さを身をもって感じる事が出来た。
- ・セラピスト役の言葉一つ一つがクライアント役の心に残ることを考えると、慎重にならなければいけないと思った。
- ・自分が制作した作品を丁寧に解釈してもらえたことがうれしかった。そこから作品を丁寧に扱うことの大切さを認識した。学校現場でも子どもたちの作品を大切に扱ってきただろうかと振り返るよい機会になった。

- ・作品に対しての愛着も感じ、セラピストとしてもっと大切にクライアントの作品を扱わないといけないと感じた。
- ・制限があることによって自分を表現出来ることに気づいた。
- ・傍らにいるセラピストによって作品の表現が違って来る。少なくともセラピストはクライアントよりも狭くなく伸びやかで常識的な容量を持っていることが要求されるだろうと思う。

#### グループでの発表・検討について

- ・グループの仲間と教員に見守られている感じを受けた。
- ・自分の制作したコラージュに対して、皆がどういった感じを受けるのかが楽しみだった。
- ・皆それぞれの個性が出ているなど感じた。
- ・自分の作品が最初に検討される順番だったことで負担を感じた。どこまで自分を出していいのかとても悩んだ。他の人の作品を見てからだと、また違ったものを作っていたように思う。

#### 【巻末資料2：セラピスト体験として印象的だったこと】

\*本授業を受講した者（3年間でのべ26名）を対象に「セラピスト体験として印象的だったこと」を自由記述（複数回答可）で回答してもらった意見をまとめたものを下記に示した。なお（ ）内の数字は同じ内容の意見を記述した物が複数いた場合の回答者数を示す。

#### 見立て・解釈について

- ・解釈が難しいと感じた。（4）
- ・先入観を持たずに解釈することの難しさを感じた。（3）
- ・自分の印象が入りすぎて独りよがりにならないように気をつけた。（3）
- ・見立てを行うのに自信がなく、当たり障りのない言葉を選んでいたところがあった。（3）
- ・いろいろな解釈が可能だと思うが、作り手のことを踏まえて解釈することが必要だと思った。（2）
- ・自分の色眼鏡で見ないためにはクライアント役に素直に聞くことだと思った。（2）
- ・具体的な解釈の進め方を経験出来た。
- ・第五課題のテーマはこれでよかったのだろうかという不安がある。
- ・セラピスト側の視点だけから作品を見ると、見立てに偏りが生じると思う。クライアント側に視点に立つことが必要。
- ・自分の解釈がクライアント役にとって侵襲的だったかもしれないと感じた。
- ・何度も作品を見直すことが大切。
- ・クライアント役の制作の様子をしっかり見ておくことが解釈に役立つ。
- ・一枚目だけの時と、二枚目以降が加わった時とでまた違った解釈が出来る幅広さに少してこずった。
- ・自分の想像がやや走りすぎるのを感じた。
- ・見立てや解釈では、じっくりと一人の人のことを考える大切さを知った。
- ・解釈にはクライアントとの関係性が重要だと感じた。
- ・解釈が主観的になりすぎてこれでいいのかと不安を感じた。
- ・解釈を深くしようと思えば出来てしまうのが少し怖いけれども勉強になった。
- ・写真の選択、制作態度などを観察することで、クライアント役の気持ちがおぼろげながら見えてきた感じを経験出来た。
- ・通常の面接よりも容易に、より多くの情報を得ることが出来たように思う。
- ・普通の面接だとかなりの面接回数を要するような段階にまで、治療関係を一気に早く築くことが出来ることに気がついた。

#### クライアント役との関係性について

- ・クライアント役にどこまで踏み込んでよいか難しい。（6）
- ・コラージュ療法とはクライアントとセラピストの二者関係で行うことが大切なのだと感じた。（4）
- ・クライアント役の健全さを感じ、安心して見守ることが出来た（2）

- ・クライアント役とのコミュニケーションでのすり合わせが大切だと思った。(2)
- ・クライアント役から自分がどう思われているのかが気になった。
- ・もっと質問してみたいと思うこともあったがしなかった。
- ・セラピスト役の態度がクライアント役に影響する。
- ・セラピスト役が不慣れな印象を与えないように気をつけた。敏感なクライアント(役)だと思えるように作れないかもしれないと思ったので。
- ・作品やその後の話し合いを通して、相手に対する興味が湧いた。
- ・楽しい話題が盛り上がったが、もし辛い話題が出たらその辛さがきつと強く伝わるのだろう。
- ・クライアント役に自分を表現しようとする意欲があり、表現してくれたのがうれしかった。
- ・クライアント役に対して慎重になりすぎると、物事を狭く捉えてしまうものだと感じた。
- ・セラピスト役の言葉かけによってクライアント役の心の動きや、作品へ及ぼす影響も変化するように感じた。
- ・作品について話を聞いていくことで、クライアント役の思いがいろいろ伝わってきてよかった。
- ・クライアント役が切り抜きを選んでいる様子や制作している姿から、何か感覚にならない感じを受けた。
- ・作品と会話から想像をふくらませてクライアント役に伝えることで、クライアント役自身でも気づかなかったことを受け入れてくれたのがセラピスト役である自分を受け入れてくれたようでうれしかった。
- ・クライアントがコラージュを作るのを見て、質問をして、という作業を通じて、一緒に一つの作業をしている感じがして、ただ横にいるだけではないのだなと思った。
- ・逆転移が起こりうる。
- ・関係性づくりの手助け(媒介)になるなと感じた。

#### セラピストとしての姿勢・自覚について

- ・無意識の領域が出たり、クライアント役の内面が表現されるので実施に当たっては慎重でなければと感じた。場合によってはコラージュ作りを中止する判断が必要な場合もあるだろうと思った。(2)
- ・今回はそうではなかったが、相手によってはセラピストの役割は大変だろうなと感じた。(2)
- ・クライアント役のために部屋を用意し、切り抜きをクライアント役に合わせて選び、クライアント役と会話し、その内面を押し量ろうとした一連の経験は、いずれ実際にカウンセリングを担当する自分にとってなによりよい勉強になった。
- ・クライアント役の目の前にいるセラピスト(役)としての姿勢を意識した。
- ・自分の中でコラージュに取り組む意識(緊張感)が変化した。
- ・フィードバックの仕方が難しい。
- ・コラージュ作りの間、セラピスト役がどこを見ていけばよいのかが難しかった。
- ・作品作りが大切だと思っていたが、出来上がった作品を眺めて、作品について熱心に聞くことの方が重要だと気づいた。
- ・自分の力量を考えて行わないと危険だと感じた。
- ・実際の臨床場面ではどのように活かされているのか、自分なりに調べてみようと思った。
- ・クライアント役が作品を作っている間には質問しない方がいいのか、課題が終わってからどの位クライアント役と話し合えばいいのかで悩んだ。
- ・もっと柔らかい雰囲気を作れたらと思った。
- ・見立てや解釈を伝える時の、コラージュ療法のセラピストとしての態度の難しさを感じた。
- ・クライアント役に感謝する姿勢を学ぶことが出来、これがこれからの自分の実践に向けてとても役に立つ経験となった。
- ・分からないことはクライアント役に聞けばいいのだと思うのだが、時々何がわからないのかがわからない感じになっていた。
- ・効果的な技法だと感じたが、まだ自分がこの技法をうまく利用出来るレベルに達していないように感じた。
- ・セラピスト役よりクライアント役の方が自分には楽しく感じられた。

#### グループでの発表・検討について

- ・発表でいろいろ意見をもらって多面的な見方があることがよくわかった。(7)

- ・発表の準備が大変だった。
- ・自分が作品から受けた印象をうまく言葉で表現出来なかった。うまく言語化して返せるようになればと思った。
- ・感じたこと、思ったことを言葉として表現して伝えるということは、コラージュ作品で表現する以上に自分にとっては難しかった。
- ・間違ってもいいから、もっと自分の感性を言語化して発表すべきだったと反省。豊かに言語表現する力を養ってゆかねば。

# Collage Therapy Practice in Clinical Psychologist Training

— A Work-out Plan of Choosing Methods and Consideration —

IMADA Yuzo

To develop the hands-on program of collage therapy practice in the training course of clinical psychologists, the collage therapy methods are reviewed in the past literature and in the generally performed programs. Newly acquired points are as follows: (1) practicing in individual interviews simulatively. (2) practicing at several times due to longitudinal understanding of the works and introducing Magazine Photo Collage (MPC). (3) reviewing in group supervision or case conference. In conclusion, a draft plan of the program, the recent practice by the author and its effects are reviewed.